

# 「儒林外史」の社会・文化的コンテクスト

—新しい読み方を求めて—

川 本 榮 三 郎

司馬遷の「史記」が文学書としても歴史書としても読まれるように、歴史が長い間、文学の一ジャンルであった。物語は歴史そのものであった。ここに史伝体の文体が生まれるのである。文学に現れた人々の日常生活のデテールから歴史の深層に迫ることもできる。逆に人々の日常生活をリアルに描くことが歴史の真実（事実）を語ることになる。物語意識と歴史意識は、想像と事実の区別というように二元論的なありかたをとることができないままに、こんな面白いことが本当にあったのだ（事実は小説よりも奇なり）という確信（強い現実感覚）のもとに物語は書かれている。このゆえに中国の物語文学はいつもその強い歴史性以上に伝奇性・通俗性にあふれているのである。

清朝中期、呉敬梓によって書かれた「儒林外史」も、このような中国に伝統的な、しかも未分化で強烈な歴史的物語意識（物語的歴史意識）に支えられていた。したがって物語のなかからその物語のもつ社会・文化的コンテクストを読みとることが十分可能である。物語というテキストに社会・文化的コンテクストを組み込んだテキストを文体とする。「儒林外史」の文体を論ずるために、社会・文化的コンテクストを明らかにしておく。このような観点からこの物語を再構成してみると、いままでこの物語に付された風刺的要素とか、作者のもっている古代の素朴な儒家的体質とか言われる評価とは別な新しいものが見えてくるのである。

テキストは「儒林外史 会校会評本」（上海古籍出版社）による。

## 1 日常化した科挙の学問—学歴社会と学校教育

学ぶということは生きていくための力をつけることである。学校で勉強し知識を習得するのは生きていくうえで役立つからである。中国には、科挙という、いわば国家公務員の養成・採用のための試験制度があった。大臣の息子であろうが、農民の子供であろうが、誰でもいつ何歳になっても受験することができた。試験問題は、儒教の九つの経典（四書五経—「論語」「孟子」等）から出された。自立した一個人の資格で受験できたから、それだけに競争も激しく選考審査も複雑で厳格に行われた。県・府の地方段階で行われる試験から始まり、何回もときには数年にわたり、ふるいにかげられた。そのかわりに合格した者には、それまでの苦労が一気に償われるほどの大きな富貴と名誉がもたらされた。学業に励んだ結果として、それがそのまま金持ちになることも社会的地位を高めることもできるとしたら、学ぶ意味がこれほど実感でき、これほど生き甲斐を感じさせるものはなかった。科挙試のために勉強することを挙業といい、勉強する人を儒の人とよんだ。「儒林外史」はこの儒の人たちの人生模様（生態）をエピソード風に描いた物語である。

今も昔も、世の中は学問・勉強している人にたいして寛大である。学問や教養があることを立派だと思い、羨ましがるのは「知識は力なり」という真理が絶対的であり、ものを知っていることによって人格もできてくると思ってしまうからである。ものを知ることの第一歩は識字

教育に始まる。「儒林外史」の時代の中国で読み書きの教育がどの程度まで普及していたかわからないが、小さな村の農民達も自分の子供達のために寺子屋式の学校をひらいていた。子供の教育を通して、社会の末端の農民達までが学ぶことの大切さを知り、科挙の持つ学問の力と学問をする儒の人達に畏れを持ちながらも、彼らの存在を受け入れ、底辺のほうから支えていたのである。

時は明朝の成化末年(成化は1465年～1487年)、山東省は兗州府汶上県薛家集という戸数百戸余りの村の観音堂に村人達が集まり、元宵節(正月十五日の祭り)の竜燈踊りの相談をしている。費用の分担金の話しもついて集会がおわると、お茶を飲みながら閑談が始まる。

申祥甫又説「孩子大了、今年要請一個先生。就是觀音庵里做個学堂。」衆人道「俺們也有好幾家孩子要上学。只這申老爹的令郎、就是夏老爹的令婿、夏老爹時刻有県主老爺的碑票、也要人認得字。只是這個先生、須是要城里去請才好。」夏総甲道「先生倒有一個。你道是誰。就是自行門里。戸総科提控顧老相公家請的一位先生、姓周、官名叫做周進、年紀六十多歲、前任老爺取過他個頭名、却還不中過學。顧老相公請他在家裏三個年頭、他家顧小舍人去年就中了学、和自鎮上梅三相一齊中的。(中略)你們若要先生、俺替你把周先生請來。」衆人都說是好。喫完了茶、和尚又下一斤牛肉喫了、各自散訖。次夏総甲果然替周先生說了、每年館金十二兩銀子、每日二分銀子在和尚家代飯、約定灯節後下郷、正月二十開館。到十六、衆人將分子送到申祥甫家備酒飯、請了集上新進学的梅三做陪客。那梅玖戴着新方巾、老早到了。直到巳碑時候、周先生才來。聽得門外狗叫、申祥甫走出去迎了進來。衆人看周進時、頭戴一頂旧氈帽、身穿元色綢旧直綴、那右辺坐処都破了、脚下一双旧大紅綢鞋、黑瘦面皮、花白胡子。申祥甫拱進堂屋、梅玖方才慢慢的立起來和他相見。周進就問「此位相公是誰」衆人道「這是我們集上在痒的梅相公。」周進聽了、謙讓不肯僭梅玖作揖。梅玖道「今日之事不同。」周進再三不肯。衆人道「論年紀也是周先生長、先生請老實些罷。」梅玖回過頭來向衆人道「你衆位是不知道、我們学校規矩、老友是從來不同小友序齒的。只是今日不同、還是周長兄請上。」

子どもの勉強のために先生を頼む(請)。観音庵を学校にする(做学堂)。県知事(県主老爺)のところへ文書(牌票)が来るが、それを読める字のわかる人が必要だ(要人認得字)。総甲(百戸の長)。顧家一族の子弟のための家塾がある。県知事は科挙試験にさきだち予備の試験を行い、受験適格者の名簿をあらかじめつくっておく(取名)。第一段階の科挙試験(院試)により合格し県の学校に入学できること(中学)、または進学という。「各自散訖」は場面転換に使われる常套句。寺子屋を開くこと(開館)。帽子が身分を表す一方巾は科挙の合格者が自分は読書人(知識人)であることを表し、普通何でもない人は氈帽をかぶる。県学あるいは府学の学生は正式に生員であるが、通称は秀才と呼び、学校の規定では年齢に関係なく、老友と呼ぶ。県知事あるいは府知事の行う予備試験の合格者を童生とし、学校では小友と呼びあう。

この物語の時代背景は、作者呉敬梓の生きた時代(1701年生、1754年没)よりさかのぼること250年余り昔の明朝中期に設定されている。作者の時代の中国は、満州の地から興った異民族の愛新覚羅家の清王朝が圧倒的多数の漢族を統治していた。なかでも、康熙、雍正、乾隆と続く三代の偉大な皇帝のもとに、その支配制度は精緻を極め、社会体制も比較的安定し、国力がもっとも充実した時代であった。また、社会経済の著しい発展とともに人々の生活も安定し、学芸や文化がかなり大衆化していた。

この物語に描かれる人情、風俗習慣、社会環境など、すべて作者の時代のものであるが、物語の時代が明朝に設定されているため、清朝時代の風習である弁髪をしている人物は一人も出

てこない。弁髪は、異民族の清朝が支配のしるしとして漢民族に強制したものである。作者の生きた十八世紀の中国を念頭におきながら、作者の眼に即して読んでいくいくのであるが、作者がとらえた中国の社会・文化をこちら側（読者）が再構成するかたちで読んでいくことにする。

さて、寺子屋の教師に招かれた周進という高齢の貧乏書生、秀才になれないばかりに親子ほど年の違う梅玖秀才様に、はじめから見下され、気まずい思いをするが、長いこと人のそしりや軽蔑に慣れてしまったためか、ばか真面目な気性のせいなのか、一言も弁解しようとしないう。身につけるものも違っている。周進は普通の帽子、新秀才の梅玖は新しい方巾をかぶり、文人気どり（方巾気）でいばっている。

次に、話題が意外なところから夢見の話になると、梅玖は秀才の試験に合格した年の初夢に、山頂にいる自分の頭上に天上の太陽が降りてくる夢を見たとき、得意気にみんなに言う。挙業している人達が集まれば、きまって話題にするのが試験の夢見のこと（夢兆）である。合格していない周進には当然めでたい夢など見ることはできない。周進にとって挙業は自己目的と化し、挙業が本来もっている正統性（学問して国家社会のために役立つ立派な人物になること）、あるいは功利性（官職につくことによって得られる利益や特典）さえも忘れてしまい、科挙に合格すること自体が目的となってしまう。人に馬鹿にされ、どんな惨めな思いをしようが、科挙社会にとりすがらしか生きていく道がない。あとは意地であり、ただもくもくとわき目もふらずに努力するだけであり、そのことによって自己の存在価値が保たれているのである。

科挙は世界に類を見ないほど出来すぎた支配制度でもあった。それは単に官僚機構のためにあったのではなく、試験制度というにはあまりに大きな影響を人々の精神生活にも及ぼした。科挙の理念が儒教の教えに基づく政教一致にあったために人々を社会的にも道徳的にも支配し、社会体制の安定をはかることにも役だったのである。

学問を通して自己修養に努め、経世済民という社会的使命観を身につけることが科挙試験の本来の目的理念であったが、時を経るにしたがい科挙のために勉強することが学問という言葉にすりかえられて、あたかも最高の徳目であるかのように広く深く社会のなかに根を張り、その社会的風潮はまるで何かの遺伝的体質のように人々に受け継がれていく。中国には政教一致の理念に基づいた科挙の制度によって、実に巧妙な学歴社会ができあがっていたといえる。

薛家集の村人達もお上のお触れ書きが読めるようにという実用的な目的にとどまらず、子供達が寺子屋教育を初学として、将来官僚となる学生を養成する県学や府学に入学することを期待しているのである。

那些孩子就像蠢牛一般，一時照顧不到，就溜到外边去打瓦踢球，每日淘气不了。周進只得捺定性子，坐着教導。不覺兩個多月，天氣漸暖。周進喫過午飯，開了後門出來，河沿上望望。誰是鄉村地方，河邊却也有幾樹桃花柳樹，紅紅綠綠，間雜好看。看了一回，只見蒙蒙的細雨將起來。周進見下雨，轉入門內，望著雨下在河里，煙籠遠樹，景致更妙。這雨越下越大，却見上流頭一只船冒雨而來。那船本不甚大，又是芦席篷，所以怕雨。將近河岸，見時，中艙坐著一個人，船尾坐著兩個衆人，船頭上放着一担食盒。將到岸邊，那人連呼船家泊船，帶領衆人，走上岸來。周進看那人時，頭戴方巾，身穿寶藍緞直裰，腳下粉底皂靴，三絛髭須，約有三十多歲光景。走到門口，與周進舉一拱手，一直進來，自己口里說道「原來是個學堂。」周進跟了進來作揖，那人還了個半禮道「你想就是先生了」周進道「正是」那人問從者道「和尚怎的不見」說著，和尚忙走了出來道「原來是大爺，請坐。僧人去烹茶來。」向著周進道「這王大爺就是前科新中的。先生陪了坐著，我去拿茶。」那王舉人也不謙讓，從人擺了一條凳子，就

在上首坐了，周進下面相陪。王舉人道「你這位先生貴姓」周進知是個舉人，便自称道「晚生姓周。」

教導—教えること。桃花柳樹—常套句的情景描写であるが、雨の降る景色を登場人物の内面に日常化することによって伝統的な花鳥風月の陳腐さを免れている。作揖と還半礼—この挨拶の仕方は二人の知識人の身分差異を表している。前科—前回の科挙試験。新中—新しく合格すること。舉人—科挙試験の第二段階である郷試に合格した者。

中国社会の基本は宗族制であり、中国の歴史においてその長大な伝統を維持するのに役だったのが科挙の制度であり、これらは中国社会の根幹をなす大きな社会・文化的コンテクストとして設定することができる。これら二つの制度に関わる言葉を手がかりにして社会・文化的コンテクストを探っていくわけであるが、紙数の関係でところどころ物語の概略だけを提示し、その原文からキーワードとなる言葉を取り上げることとする。

周進が子供たちに手習いをさせている教室に王舉人がやってきて、ひとりの生徒の提出した習字を見て驚いて言うには「これはお笑い草だ。私の今年の初夢に会試合格者の掲示板が現れ、そこに私の名があったのはもちろんですが、その第三番目が汶上県の人で荀玫なのです。私の県にそんな名前の舉人はいないと疑っておりましたところ、こともあろうにこんな小学生の名前だとはね。これと私が同年の進士合格になろうとは、まさか。してみると夢はあてにならないね。まして功名の大事、すべからく文章を第一とすべきであって、鬼神なんているはずがありません。」たがいに話をしているうちに日も暮れ、それぞれに食事し、各自お休みの言葉言い寝に就いた。このあと薛家集の村人たちは旬家の子供が王舉人様と同年の進士に合格するのだと知って笑い話にした。しかし子供の親たちはこの話を聞いて心おだやかではない。旬家から送りものをされているので周先生はえこひいきするのだと言い、夏総甲も親たちに同調して周進をやめさせてしまった。

荀玫—寺小屋で学び始めたこの時七歳。開蒙—字を知ることによって知識の習得を始めること。孝廉—通称舉人。各自—宿—各自散会と同じく場面を締めくくるための常套句。

“荀進士の誕生”は夢の世界の話してはすまなくなった。それがもとで周進が教師の職を解かれるという結末は、学歴社会の学校教育には生徒をはさんで先生と親の間に問題がおこりやすいこと、また、こんな小さな村の寺子屋教育も科挙という国家試験にまでかかわっていることをものがたっている。

しかし、これ以上に夢見の話しが物語中に大きな比重をもつのは、夢が当時の人々の意識の世界を支配し、現実の裏返しに夢であると信じられているからである。この話しの後、十年ほどたつてこの夢が正夢となって、実際荀玫が王舉人といっしょに進士の試験に合格し、その奇遇を確かめるために王舉人が荀玫のもとを訪ねてくるという風に話しが展開する。そして、第八回の話しから、王舉人のエピソードが展開され、そのなかで、夢の魔力に魅入られた王舉人は自己の人生を目に見えない絶対者に委ねて生きていく宿命論者として描かれる。このように夢が物語展開のうえでも大きな役割をになわされている。

夢見のほかに挙業人達の間で話題になるのが試験場に宿る鬼神の話しである。それは、科挙の合格が人力だけでなせる技でないこと、不可思議な力の存在を認めていることであり、それほどまでに科挙の試験が挙業人達の心に重くのしかかっていたからである。自己の能力や努力だけではどうにもならない。つまり、答案の出来不出来や人格の善し悪しは絶対的なものではなく、試験官との関係あるいは相性の善し悪しで決まるのではないかという疑念とともに、そのような運命のめぐりあわせを鬼神のおかげであると合理化し、自己の運の悪さを慰めたので

あろう。このほかにも、風水（墓地や家屋の方位や相位を見て吉凶を決める）の迷信に惑わされ、先祖の靈験にすぎる知識人もたくさんいた。

## 2 試験官の好みに委ねられて

さて、夢見の話しが災いして、周進は寺子屋の先生を首になり、家に帰っていた。ある日のこと、姉婿が様子を見にきて、学問だけしても飯が食えるわけがないから帳簿付けの仕事をしてみないかと勧めるので、これ以上落ちぶれることはないと思った周進は二つ返事で引受け、商人仲間にくわわる。商人達は周進が挙業の人だと知って、このまま終わるのはおしいことであるから、二百両もの大金を出し合い郷試の受験資格を買ってあげる。あっさりとおきらめていた科挙であったが、商人達の援助にすぎりつき、商人達の期待通りに周進はみごと合格する。引続き、京師（都）に上り、会試を受け、会試にも及第し進士になり、殿試（天子の御前で行う試験）に臨み、三甲（合格者の序列、一甲から三甲まで）の成績で合格し、部属（中央官署の事務官）を授かる。三年もすると、今度は御史（官吏の監察を司る）に昇任し、やがて広東省の学道（教育長）に勅任された。まさにとんとん拍子の出世である。

広東省学道となった周進は広州に着任し、すぐに院試をとりおこなった。二県の童生を集めた試験場で、弊衣破帽の貧相な受験生が震えちじこまりながら答案用紙（卷子）を受け取るのを見て、周進は自分の立派な服装（緋ほうと金帯）とひき比べ、彼のなかに昔の自分を見る思いがする。その童生が一番最初に答案を出してきたので、受験者名簿（童生名冊）で名前を確認し、「おまえが範進だね」と声をかけてやる。受験届けには三十歳と書いてあるが、本当は五十四歳であること、また二十回余りも受験してきたことがわかると、わが身と同じ道をたどっている老童生範進に同情をおぼえる。

学道道「如何総不進学」範進道「総因童生文字荒謬，所以各位大爺不曾賞取。」周学道道「這也未必尽然。你且出去，卷子待本道細細看。」範進磕頭下去了。那時天色尚早，并無童生交卷。周学道將範進卷子用心用意看了一遍，心里不喜，道「這樣的文字，都說的是些甚么話怪不得不進学。」丟過一辺不看了。又坐了一会，還不見一個人來交卷，心里又想到「何不把範進的卷子再看一遍，倘有一線之明，也可憐他苦志。」從頭至尾又看了一遍，覺得有些意思。正要看看，却有一個童生來交卷。那童生跪下道「求大老爺面試。」学道和顏道「你的文字已在這里了，又面試些甚么。」那童生道「童生詩詞歌賦都会，求大老爺出題面試。」学道變了臉道「当天天子重文章，足下何須講漢唐。像你做童生的人，只該用心做文章，那些雜覽学他做甚么。況且本道奉旨到此衡文，難道是來此同你談雜学的么。看你這樣務名，不務実，那正務自然荒廢，都是些粗心浮氣的說話，看不得了。左右的，趕了出去。」一声吩咐過了，兩傍走過幾個如狼似虎的公人，把那童生叉着脖子，一路跟頭叉到大門外。周学道雖然趕他出去，却也把卷子取來看。看那童生叫做魏好古，文字也還清通。学道道「把他低低的進了学罷」因取過筆來，在卷子尾上点了一点，做個記認。又取過範進卷子來看，看罷不覺嘆息道「這樣文字，連我看一兩遍也不能解，直到三遍之後，才曉得是天地間之至文，真乃一字一珠，可見世上糊塗試官不知屈熬了多少英才。」忙取筆細細圈点，卷面上加了三圈，即填了第一名。又把魏好古的卷子取過來，填了第二十名。將各卷滙齊，帶了進去。發出案來，範進是第一。謁見那日，着實贊揚了一回。点到二十名，魏好古上去，又勉勵了幾句「用心舉業，休学雜覽」的話，鼓吹送了出去。次日起馬，範進独自送在三十里之外，轎前打恭。周学道又叫到跟前說道「龍頭屬老成。本道看你

的文字火候到了，即在此科一定發達。我復命之後，在京專候。」範進又頭謝了。起來立著。學道轎子一擁而去。範進立著，直望見門槍影子抹過前山，看不見了，方才回到下處。謝了房主人。他家離城還有四十五里路，連夜回來，拜見母親。

學道——省の教育長官，勅任される。文字—詩でも文章でも書かれてあるもの。卷子—試験の答案。面試—面接による口頭試問。詩詞歌賦—文章（散文）と區別される。科挙の試験には作詩は出題されなかったが，中国の知識人たちの身につけなければならない大事な教養のひとつであった。加三圈即填第一名—三重丸を付けて第一等の合格者とする事。

周進は學道として赴任するにあたり，答案は幕客（學道が自費で雇った補佐官）の採点だけにまかせておくと，真の英才を埋もれさせることになるから，自分の目で詳しくみてやると決意してやってきたのであったが，やはり情には勝てなかった。範進の意味不明の文章をむりに含蓄のある出来た文章であると自分に言い聞かせ第一等の合格者に仕立て挙げてしまった。

科挙は単に知識の正確さと量を測るだけのテストではなかった。人物，文章ともに考査の対象となるから，試験官の好みに委ねられる部分が大きかった。試験問題は四書五經のなかの一句または一節を示し，その意味を派生させて，持論を展開するものであったが，その文章には一定の形式をとらなければならなかった。まず，「起」，「承」，「転」，「結」を踏まえること，そのうち「承」，「転」のところは四つの「股」とよばれる部分に分かれ，さらにその「股」の一つずつに必ず対句を仕立てること，つまり全部で八つの「股」からなるように形式を整えた文章（八股文）で書くことが要求された。そのために考査の主眼も文章の内容とそれを通して見るべき人物の中味よりも文章の体裁のほうに傾きやすかった。受験生のほうも文章作りの技術面に意を用いるようになった。

科挙の試験は，その社会的効用が一面的に大きすぎたこと，そのうえ学問内容が余りにかたよりすぎたために国家的大事業にしては多方面に応用の効く人材を育てることができなかった。かえって学問する人の多くは出題される經典を暗記するために精神的活力をすりへらし，そのために彼らの知性が枯渇してしてしまったといわれる。

作者は，作品の執筆意図を説明するために設定した導入部の第一回で，脱体制的な孤高の士，王冕を登場させ，新王朝の明が八股文という新しい解答方式を取り入れたことを非難させる。「このやりかたは良くないことだ。読書人達にこのような立身出世の道ができてしまうと，彼らは学問道徳と出處進退を軽視することになるだろう。」と，王冕は言い，後の士大夫達の出世主義を予言し慨嘆する。

### 3 社会的遺伝としての学問

さて，運の付始めた範進は続けて次の郷試に挑戦したいのだが，その日の食うのにも事欠く貧乏所帯のこと，省城に行く旅費が工面できない。しかたなく妻の実家である豚肉屋の胡おやじのところ頼みに行くと，胡おやじから唾を吐きかけられ，「おまえはなに様のつもりか，このうえおまえの母親とおれの娘を飢え死にさせるつもりか，秀才様になれたのも試験官の先生がおまえをかわいそうに思っていたこと，そのうちいい仕事を見つけてやるから上級試験はやめておけ」とさんざん罵られたが，諦めきれない範進はひとに内緒で試験を受けにいき，みごと郷試に合格する。

到出榜那日，家里没有早飯米，母親吩咐模範進道「我有一只生蛋的母雞，你快拿集上去壳了，買幾一升米煮粥喫，我已是餓的兩眼都看不見了。」範進慌忙抱了雞，走出門去。才去不到兩個時候，只聽得一片声の鑼響，三匹馬闖將來。那三個人下了馬，把馬拴在茅棚上，一片声叫道「快請範老爺出來，恭喜高中了。」母親不知是甚事，吓得躲在屋里，聽見中了，方敢伸出頭來說道「諸位請坐，小兒方才出去了。」那些報錄人道「原来是老太太。」大家簇擁着要喜錢。正在吵鬧，又是幾匹馬，二報三報到了，擠着看。老太太没奈何，只得央及一個隣居去尋他兒子。

(中略) 隣居見他不信，劈手把雞奪了，擗在地下，一把拉了回来。報錄人見了道「好了，新貴人回来了。」正要擁着他說話，範進三兩步走進屋里來，見中間報帖已經升挂起來，上写道「捷報貴府老爺範進高中廣東鄉試第七名亞元。京報連登黃甲。」範進不看便罷，看過一遍，自己把兩手拍了一下，笑了一声道「噫，好了，我中了。」說着，往後一交跌倒，牙關咬緊，不省人事。老太太慌將幾口開水灌了過來。他爬將起來，又拍着手大笑道「噫，好了，我中了。」笑着，不由分說就往門外飛跑，把報錄人和隣居都下了一跳。走出大門不多路，一脚踹在塘里，掙起來，頭髮都跌散了，兩手黃泥，淋淋漓漓一身的水，衆人拉他不住，拍着，笑着，一直走到集上去了。

範進を正気にもどすために、日頃彼がいちばん恐がっている妻の父，胡おやじに氣を失うほど横面を殴らせたところ，意氣を吹き返し，正気に戻った。胡おやじは範進が金を借りに行った時とは違って，がらりと態度が変わり，齒の浮くような美辞麗句をならべて娘婿をほめることこのうえなし。みんなで家に帰る途中，範進が先頭を歩き，胡おやじが後ろから婿の後ろ襟のしわを見て頭を低くして何度も何度もしわをのぼしてやりながら家の門まで来ると，「挙人様のお帰り。」と叫んだ。

老太太一単に母親あるいは老娘と呼ばれていたのが，急に大奥様と呼ばれた。報錄人一単に合格を知らせるだけでなく，ご祝儀（喜錢）を目当てにしてやってくる。新貴人一合格した範進にたいして。

この物語のなかで，人々は精力的に動き回り，さかんに言葉を交わし，積極的にコミュニケーション参加とコネクション作りを行う。知識人（読書人）や一般庶民が日常生活のなかで相互にいりみだれ，言い合いやりあいする言葉や言い回しは，相手の心の機微をとらえ，まことに巧みである。人の言ったことを逆にとる論法とか，一つの言葉を裏返して，そこに別の意味を言い当てるとか，揚げ足取りというのか。すなわち，言葉のかけあい，言い合いを善として人間関係を生きることによって機能し成立している中国社会の縮図を見てとることができる。こういう日常を事細かに描くことに中国の伝統的なりアリズムはなんのためらいもなくその力量をいかんなく発揮する。

天上のお星様のように偉くなった範進は，自分の意志に関係なくまわりの人々がほうておかない。さそっく，地方のボス張郷紳（郷紳とは官をやめて郷里に引退している者）が範進のほったて小屋の家に祝辞を述べにやってきて，銀五十両と小さな家を差し上げると言う。田畑を贈る者，店を贈る者，家財を贈る者，夫婦して身を投げ下僕になる者が現れ，范進の家は急に金持ちになる。ところが，世の中，皮肉なものである。立派な家，豪華な衣装，高級な食器，果ては下僕までが自分のものであると知った母親がびっくり仰天，心臓発作をおこし，あえなくあの世に行ってしまう。貧乏のどん底において餓死することもなかったのに，生活の激変ぶりにショック死するというありえないような結末を迎える。愚劣の極め付きともいえるこの風刺には，哀れであるが，悲惨さがすこしも感じられない。爽快であり，滑稽ですらある。

さて，範進はほとんど師匠の周進とおなじような出世コースを歩み，山東省の学道に勅任さ

れた。赴任するにあたり、国子監司業（国立大学の副学長）となっている周進のもとに挨拶に行くと、周進は薛家村の寺小屋で教えたときの生徒であった荀玫のことを話し、その将来を範進に託す。その荀玫は、ちょうど範進学道のとり行院試に応じ、結果は第一等で合格する。荀玫が秀才試験合格の報せをもって村に帰ってくると、申祥甫が杖をつきながら祝賀にやってきた。村人も御祝儀をもってきた。荀玫は観音堂を借りて村人をもてなす。周閣下は今では村人から崇め奉られ、観音堂には彼のために長生牌（長生きを願って奉納）まで奉納されている。荀玫はその位牌の前でうやうやしく礼拝した。ときに、周司業七十歳余り、範進学道六十歳余り、荀秀才二十歳ぐらいである。第二回の周進から始まったエピソードは、周進から範進、範進から湯知事、厳兄弟を経て、第七回目のエピソードで、舞台がまた始めの薛家村に戻り新時代の荀玫へと受け継がれていく。それは、科挙の学問が何世代にも渡って絶えることなく営々と築かれていくことをものがる。

物語構成としては、挙業に励む人々の成功にたどりつくまでの過程とその日常を追跡しながら、それぞれの人生を因縁付け、円を描くようにむすんでいる。一つ一つの話しが環をなし、環と環がつながって鎖をなし、どこまでも続いていくのが、章回小説の形態的特徴である。どのように話を語り継ぎ面白い話にするかは作者（語り手）にとってかなり難しい問題であると同時にそこにこそ作者の力量、文章力が問われる。この物語の作者、呉敬梓は白話短編小説集のいわゆる「三言」の作者たちほどに専門的な語り手ではなかったこと、これらの短編とは違ってこの長編章回小説はいわば短編小説のあるひとつの統一したテーマでいくつもつながりあわせていくためどのように場面転換をはかるかが難しい問題として創作過程におこったのであろう。おそらく「水滸伝」から物語展開のパターンを学んだものとおもわれる。「水滸伝」の最初の主人公が王進であり、彼のエピソードを引き継ぐのが王進から武術の手ほどきを受け弟子となる史進である。これはまさに「儒林外史」の周進と範進に対応する。

さらに各回での細かな日常の場面転換についても、日常それ自体が平板であり、なにも変わった面白いことがいつもおこるわけでないから、聞き手あるいは読み手の好奇心をかきたてるような内容にして興味を持続させるようにその素材を組み合わせる技術・手法が要求されたであろう。物語の構想については文体論として別稿を借りて詳しく論証することにしたい。

#### 4 才女の妻と詩人の夫が雅俗を言い争う

さて、薛家村の逸材、若き秀才荀玫は順調に出世コースを歩み始め、最上級の会試（合格者を進士と称する）に第五等で及第したが、不思議なことにこの時の会試には十数年前に「荀進士誕生」を言い当てた王挙人もその夢見通りに合格していた。王はこの奇遇を確認するために荀玫のもとを訪ね、「二人は天上の合格掲示板に名を連ねた仲、これから同官同僚となり、互いに助け合って行きましょう」と将来の出世の約束まで取り交わす。

夢見占いに気をよくした王はだめ押しをするかのように荀玫を誘って、二人の運勢を占師の陳和甫に占わせる。まもなく二人は占い通りの解釈ができるような出来事に遭遇する。荀玫は母親の死に会い、王恵（恵は王の名前）は自分でも処し難い変事に巻き込まれ、運命のいたずらに翻弄される。王恵は自分の本意に反して、皇帝一族の一人が起こした反乱軍に参加したとみなされ、鎮圧に向かう政府軍（王陽明が指揮をとった）から指名手配され、追ってからのがれるために山里深く隠れ住むことになる。

その逃げ延びる途中、南昌府の知事であった蘧太守（太守は府知事のこと）の息子、蘧景玉



によく似た若者に会う。南昌府知事として赴任していった時の前任者が蘧太守であり、任務引継ぎの時知り合ったのが景玉である。この若者があまりによく似ているので、こらえきれずに話しかけ、姓名と出身地を確かめると、やはり景玉の息子、つまり蘧太守の孫である蘧公孫（公孫とは孫に対する敬称）であり、幼時父の景玉が亡くなり、祖父に育てられてきたことがわかった。路銀に困っていた王恵はさっそく蘧公孫に無心を言い、二百両の銀子を用立ててもらい、替わりに古本が数冊はいつている枕箱（小物いれのついた小箱で枕にもなる）を差し出す。そして訳も告げずに、また新しい逃避行へと旅立つ。ここで、物語はこの枕箱を受け取った良家のぼっちゃん、蘧公孫のことに話しを語り継ぐ。蘧公孫も旅の途中であり、祖父から言いつかり、杭州の親類に貸していた金を取り立てにいき、住所の嘉興府に帰るところであった。蘧公孫は王からもらった枕箱のなかに入っていた本が天下に二冊とない本だと知って、ひそかに自分が補筆し、自分の名を添えて刊行し、それを百部印刷し広く親戚朋友に贈った。これを見た人々は蘧太守の孫、公孫を少年の名士としてもてはやした。蘧太守も本当の事を知っていたが、とがめずに以後いつも家において詩を作ることを教えた。

ある日のこと、蘧太守の甥子の婁玉亭と婁瑟亭の二人がやってきた。この二人の亡父は大臣を務め、一番上の兄は施政司の長官をしているという恵まれた科挙コネクションのなかにあるにもかかわらず、勉強のほうはあまり芳しくない。二人とも反骨精神がおうせいで奇行も多く、固苦しい宮仕えなどには不向きな変わり者である。蘧太守は二人を部屋に通し、茶を進め閑談した。二人の話しが反乱軍の寧王とそれを鎮圧した王守仁（王陽明）のことに絡んで、現政権の批判にまで及んで来たので、蘧太守が「朝廷の大事はわれわれ臣下たるもの、口にするはつつしまねばなりません」として、政治むきの話はおしまいにする。

この妻兄弟は豪俠の気があり、義理人情厚く、意気に感ずる人のためならば労を厭わず働いた。いままた孫の嫁捜しを蘧太守に頼まれ、気にかけていたところ、ちょうど先方から声をかけてきたのが魯編修（編集とは翰林院一王室直属の学士院の役職）という学者である。魯編修には息子がなく、ひとり娘のために婿取りをしたいということである。渡りに船、善は急げとばかり、この結婚話を電光石火のごとくまとめてしまった。

話說蘧公孫招贅魯府，見小姐十分美貌，已是醉心，還不知小姐又是個才女，且他這個才女，又比尋常的才女不同。魯編修因無公子就把女兒当作兒子，五六歲上請先生開蒙，就讀的是「四書」「五經」，十一二歲就講書，讀文章，先把一部王守溪的稿子讀的滾瓜爛熟。教他做「破題」「破承」「起講」「題比」「中比」成篇。送先生的束脩，那先生督課，同男子一樣。這小姐資性又高，記心又好，王，唐，瞿，薛，以及諸大家之文，歷科程墨，各省宗師考卷，肚里記得三千余篇。自己作出来的文章又理真法老，花團錦簇。魯編修每常嘆道「假若是兒子，幾十個進士，狀元都中來了。」（中略）小姐心里道「這些自然都是他爛熟于胸中的了。」又疑道「他因新婚燕尔，正貪歡笑，還理論不到這事上。」又過了幾日，見公孫赴宴回房，袖里籠了一本詩來灯下吟哦，也拉著小姐併坐同看。小姐此時還害羞，不好問他，只得勉強看了一個時辰，彼此睡下。到次日小姐忍不住了，知道公孫坐在前邊書房里，即取紅紙一條，写一行題目，是「身修而後家齊」。叫采苹過來，說道「你去送与姑爺，說是老爺要請教一篇文字的。」公孫接了，付之一笑，回說道「我于此事不甚在行。況到尊府未經滿月，要做兩件雅事，這樣俗事，還不耐煩做哩。」公孫心里只道說向才女說這樣話，是極雅的了，不想正犯著忌諱。当晚養娘走進房來看小姐，只見愁眉泪眼，長吁短嘆道「小姐，你才恭喜，招贅了這樣好姑爺，有何心事，做出這樣模樣。」小姐把日里的事告訴了一遍。說道「我只道他學業已成，不日就是舉人，進士，誰想如此光景，豈不誤我終身。」養娘勸了一回。公孫進來，待他詞色就有些不善，公孫自知慚愧，

彼此也不便明言。從此啾啾唧唧，小姐心里納悶，但說到學業上，公孫總不招攬，勸的緊了，反說小姐俗氣。小姐越發悶上加悶，整日眉頭不展。夫人知道，走來勸女兒道「我兒，你不要恁般呆氣，我看新姑爺人物已是十分了，況你爹愛他是個少年名士」

五六歳上請先生開蒙一女子は科挙試験を受ける資格がなかったにもかかわらず、魯家では一人娘に受験勉強をさせている。女子にも識字教育は必要とされていたが、魯編修は宗師考卷一県学(府学)の教官がつくった答案までも学習させている。俗事、俗氣、雅事—中国の知識人(読書人)は雅俗にこだわった。ものごとの善し悪しを決める時の普遍的な価値基準であった。不俗(普通一般だれでも考えたり、行ったりすることをしないということ)に大きな価値をおいたが、さらに積極的な生き方として働くことと反俗ということになる。不俗がすぐに雅になるわけでない。

ここでは、父親から科挙の八股文ばかりたたきこまれた才女と科挙の文章を勉強したことの無い詩人の公孫、生き方の違うふたりの夫婦が対比されている。この才女はまったく詩の雅趣が理解できないのである。男に生まれていればエリート中のエリートになり、功名富貴思いのままとしたであろうが、女であるために科挙の試験を受けられないのを悔しがり、実際、生まれてきた男子には四歳頃から手習い素読をたたき込み、自分の夢をかなえるべく教育ママに変身していく。この物語が全篇、男社会の男の論理で覆い尽くされている中であって、主人公となる男の妻あるいは娘として登場する女性達は、男以上に立派な人間として位置づけられている。そもそもこの物語の登場人物のどの一人をとってみても、愚劣、間抜け、恥知らず、狡猾、小心、不見識、無節操等、人間性にとって負の価値が付与されるばかりである。たとえ我こそはと思っている人物でも必ず弱点が隠されている。当時、この小説が出版されるにあたり、ある選者が序文で、「儒林外史」の一冊は世態人情を映し出し、その紙片にはちみもうりょう(物の怪)が総出演しているようなものだとして評した。「儒林外史」という堅苦しい題名とはおよそかけ離れた、面白おかしくも哀れな人生の物語となっているのである。たしかに、「儒林外史」には否定されるべき醜い世界が展開され、物の怪のような人物達の実相を小気味よく暴き出しながらも、作者は彼らに対してどこまでも楽天的であり、なまじっか深刻ぶるよりも彼らを豪快に笑い飛ばしてしまうのである。青木正児氏は、このことをこの小説が遊びの精神に徹したからこそ真摯な芸術になったという。つまり、この物語が遊び半分、面白半分の虚構性(物語性)を追求することによって、科挙社会に組み込まれた人間の日常性をリアルに描くことができ、人間存在の普遍性を再現することが出来たのである。魯迅は「中国小説史略」のなかで、優れた風刺というものは誰の眼にもそれとはわからないように、普通の日常のなかに隠されているのが本来のありかたであり、「儒林外史」の風刺はそのように物語られていると評する。

## 5 孝養と読書と科挙—孝行息子が学問に目覚め

人間はこの世に生を受ける時に親を選べないこと以外にあらゆる場面で何らかの選択を迫られ、自分の意志で何かを選択しながら生きている。しかし、自分の思いのままに選び取ることができないのは他者の選択を受けていることでもある。選ぶことと選ばれることは、この裏表であり、相補的、相互的であるが、両者はそれぞれの論理と理念をもって、自分にとってより良いものを目指して選択する。選択機能が最も効率よく働くのが試験制度である。学歴社会は試験制度によって支えられている。勉強して偉くなること、学歴をもって職と食を得る手段

とすることは自立した一個人の自己実現の要求として当然のことである。なぜ勉強するのか、なぜ学業成績をよくして、上級の学校に入学しなければならないのか。一人の農民出身の若者が科挙という学歴社会にどの様にして組み込まれていくのか、また科挙コネクションのなかで人間がどの様に変貌していくのかを探ってみよう。

彼はその日の食うのにも事欠くほどにまずしいが、読書好きで、どんな時でも本を離さない、親思いの真面目な青年である。彼は偶然、受験の神様のような先生に出会い、科挙の大義を説かれる。

馬二先生道「不然，你這一到家，也要些須有個本錢奉養父母，才得有功夫讀書。我這里鏡拿十兩銀子与你，你回去做些生意，請医生看你尊翁的病。」匡超人接了衣裳，銀子，兩泪交流道「蒙先生這般相愛，我匡迥何以為報。意欲拜為盟兄，将来諸事還要照顧。只是大胆，不知長兄可肯容納。」馬二先生大喜，当下受了他兩拜，又同他拜了兩拜，結為兄弟。留他在樓上，收拾菜蔬，替他錢行。喫着，向他說道「賢弟，你聽我說。你如今回去，奉事父母，總以文章學業為主。人生世上，除了這事，就沒有第二件可以出頭。不要說算命，拆字是下等，就是教館，作幕，都不是個了局。只是有本事進了學，中了舉人，進士，即刻就榮宗耀祖。這就是「孝經」上所說的「顯親揚名」，才是大孝，自身也不得受苦。古語道得好「書中自有黃金屋，書中自然有千種粟，書中自有顏如玉」，而今甚么是書。就是我們的文章選本了。賢弟，你回去奉養父母，總以做學業為主。就是生意不好，奉養不周，也不必介意，總以做文章為主。那害病的父親，睡在床上，沒有東西喫，果然聽見你念文章的声氣，他心花開了分明難過也好過，分明那里疼也不疼了。這便是曾子的「養志」。假如時運不好，終身不得中舉，一個廩生是来的，到後來，做任教官，也替父母請一道封誥。我是百無一能，紀年又大了，賢弟你少年英敏，可細聽愚兄之言，個日後宦途相見。」又到自己書架上，細細檢了幾部文章，塞在他棉袄里卷着，說道「這都是好的，你拿去讀下」匡超人依依不捨，又急于要家去父親，只得洒泪告辭。馬二先生携着手，同他到城隍山旧下処取了舖蓋，又送他出清波門，一直送到江船上，看看上了船，馬二先生辭別進城去了。

結為兄弟—義兄弟の約束をすること。奉事父母，榮宗耀祖と以文章學業為主—親孝行と科挙の勉強は両立するというよりも不二のものであるということ。書中自有黃金屋—科挙制度が欲望原理によってうごいているということ。

馬二先生はなかなかの陰徳の持ち主である。これまでも、行く先ざきで人知れず人助けをし人に恵みを施してきた。いまもまた、自分の生活を犠牲にしてまで、将来性のある超人に気前よく教育資金を差し出す。これは、「陰徳があれば必ず陽報有り(人知れず良いことをしておくと、後から必ずはっきりと目に見える報いがある)」という、いわば助け合いの精神であり、中国人の社会生活をかなり深く律していた。祖先崇拜の強い中国では、目に見えない死者に対する礼が最高の陰徳である。親族が葬祭を行うのは当然であるから陰徳とは言わないが、他人の埋葬に費用を提供することが陰徳となる。読書人の場合、陰徳があれば科挙に合格できるという論になる。馬二先生はたくさん陰徳を積んだわりにはまだ舉人(科挙試の第二段階である郷試に合格した者)にもなれない秀才の身であり、受験参考書を作って生活しているのであった。

超人にとって、受験の神様みたいな馬二先生に見込まれ、科挙の至上主義を吹き込まれたことは決定的であった。科挙に男子一生の夢をかけることを決意したのである。

## 6 孝養を県知事に認められて

科挙社会において孝養と学問は二者択一ではなかった。それは儒教の教えによって、学問することが自己実現のためだけにあるのではなく、立身出世し家名をあげることで親孝行に結び付けられていたからである。これは道徳原理としては明快であり、受け入れやすかった。しかし、科挙の学問は、いつの間にか真理のためにするのでもなく、学問を世の人々のために還元するためにするのでもなく、また自分の人格を磨き、人間性を豊かにするという自己修養のためでもなくなっていく。それはひとえに直接的に功名富貴という欲望原理に支えられていた。ここから多くの悲劇も喜劇も生まれたのである。

馬先生から旅費と生活資金を貰受けた超人は一路、病気の父とやさしい母の待つわが家をめざして帰る。家に着いた彼を母親が出迎える。旅に出した息子のことが心配で帰りを待ちわびている母親、そのときの母親の態度が「門のたたきかたで子供とわかる」、「身につけている綿いれをつまんでみる」と描かれる。これらの細かい表現の中に些細なことも見逃さない、作者の描写力の確かさ、目の付けどころの新鮮さが感じられる。

他娘向他道「自從你跟了客人去後，這一年多，我的肉身時刻不安，一夜夢見你掉在水里，我哭醒來。一夜又夢見你來家望着我哭，把我也哭醒了。一夜又夢見你頭戴紗帽，說做了官，我笑着說「我一個庄農人家，那有官做」傍一個人道「這官不是你兒子，你兒子却也做了官，却是今生再也不到你跟前來了。」我又哭起來說「若做了官就不得見面，這官就不做他也罷」就把這句話哭着，吶喝醒了。把你爹也吓醒了。你爹問我，我一五一十把這夢告訴你說我心想痴了。不想就在這半夜你爹就得了病，半邊身子動不得，而今睡在房里。」外辺説着話，他父親匡太公在房里聽見兒子回來了，登時那病就輕鬆些，覺得有些精神。匡超人走到跟前，叫一聲「爹，兒子回來了」上前磕頭。太公叫他坐在床沿上，細細告訴他這得病的緣故。

紗帽一役人（文官）が礼装用に用いた。

超人がまだ役人にもなっていないのに、「役人なんぞになるから罰が当たった」として父親を半身不随の体にしてしまう。これは、超人が立身出世のために何かを犠牲にしなければならないという運命の試練を課しているのである。夢が現実を先取りする形で現れる。夢が一人の人間の将来を予告する。夢と現実が交錯しながら、現実が夢の通りになる。通俗的には、男子たるものが出世すれば、故郷に錦を飾り、親にも孝行ができるのが普通であるが、「息子が役人になったら、母親なんぞに会いに来ない」と言う。また他の処では、府知事を引退した老人が「私が役人なんぞになったが為に、息子が幼子を遺して早死にしたのは天罰が下ったのだ」と言う。このように、因果応報の情念の世界にまで踏み込んで、役人になることを悪と決めつけるところに、科挙制に対する根深い怨念が込められているように見える。

物語は超人の涙ぐましいばかりの孝養ぶりを事細かに綴っていく。大柳荘村に大変な孝行息子がいるといううわさがこの町の保正（町長）をしている潘老人の耳にはいり、潘老人はなにかに超人に眼をかけてやる。超人がある夜遅くまで文章を朗読しているとき、たまたま村に宿をとった県知事がそばを通りかかりこの声を聴いて感心して、潘保正を通じて超人に童生の試験に応じるようにとやってきた。数日後、超人は童生の試験（県知事が行う）に応じ、合格した。県知事は超人を呼び出し、院試（省の教育長、学道が行う試験）に応じるときにも援助を約束し、親の孝養のために二両の銀を渡した。村人達は、超人が一番で合格して知事様にお褒めの言葉を授かったというので、合格祝いにやってきた。次の年、温州府でひらかれた院試

を受けた。後援者である県知事が試験終了後、学道のまえにひざまずいて、「私が県試で一番にとりあげた匡迥は赤貧の士であり孝子である」と、超人の孝行ぶりを事細かに報告した。町や村の才子や孝子を見だし、中央に推挙するのも県知事の仕事である。県知事の格別の引立てもあって、超人はみごとに合格する。

学道を行う院試に合格すると、地元の県あるいは府の儒学（学校）に入学できる。その学生達を正式に生員というが、一般に秀才と呼ばれ、士大夫（読書人）の一人として、その家族も尊敬されるほど社会的地位の高い身分である。この段階でようやく出世コースに乗ったことになる。参考書編集や家庭教師、あるいは幕客の仕事がもたらした。

明清の頃、進士に合格できるのは三千人の生員にたいして一人の割合であったというから、エリート中のエリートである。現代日本の中央省庁の高級官吏達がぐりぬけてきた国家公務員試験よりはるかに困難な関門を突破しなければならない。誰でも受験できるからといって、一般庶民がこれに合格するには針の穴を通るほどにむずかしかった。だから、農民のレベルでは、子供が秀才になって、官立の学校あるいは私設の塾等の教師として身を立てられれば、最高の親孝行であり、家名をあげたことにもなる。次の段階の中級、上級の試験である郷試や会試に応じて挙人或進士になることは望外の望みであった。

超人のばあい、馬二先生と出会うまでにどんな勉強をしてきたか知らないが、普通、秀才になるまでには幼時期から四書五経の素読をし暗記し、十四五歳頃から二十五歳頃までに県試や府試を受けられるようにしておかなければならないという。超人も晴れて秀才様とよばれて、儒の人達の仲間入りができ、いやがおうでも科挙社会に組み込まれていくことになる。

## 7 ひたすら功名を求めて

献身的な孝行と禁欲的な勉学によって、自分の道を切り開いた超人の、自己実現の意欲とそのたくましさは賞賛に値する。社会の底辺層にいる者が士大夫階層にはいあがるまでには並み大抵の努力ではできないことを物語る。

さて、病床にあった父は息子のあらんかぎりの孝養も空しく、いまわの際に「将来すこしばかり暮し向きが良くなったからといっておごりたかぶったりして、若いときの気持ちを無くさないように、わしが死んで一年の喪がすんだら、急ぎ嫁をもらうこと、ただし貧乏人の娘であること、万が一にも富貴を望んだり、高貴の家と縁結びをしないように」と遺言し息をひきとった。はたして秀才の身分を得た超人は、これからも科挙のために学問をしていくことが本当の幸せの道につながるのだろうか。

ある日のこと、潘老人が李県知事がちょっとした過失がもとで解任されたという知らせをもってきた。超人は見舞いのために県城に行くと、百姓（庶民）達が県知事の印鑑を取り上げに来た温州府知事を取り囲んで、李県知事の留任を要求して大騒ぎしていた。次の日、撫民官がきて、扇動の首謀者を数人逮捕した。潘老人の話によると、首謀者の中に超人の名もあがっているという。超人は潘老人の忠告にしたがって、老人の知合いがいる杭州に身を隠すことにした。潘老人は、杭州の布政司（省の民政と行政を管理する）で小役人となっている従兄弟の潘三への紹介状を書いて超人にもたせた。母に涙の別れをし、書籍を荷作りし、出発した。

すべて人生は塞翁が馬、この後、超人の人生はいよいよ運命の波間におかれ揺れ続けるだけである。超人にとって、杭州は思い出深い街である。途中、温州の船宿で、景蘭江という頭巾屋と知合いになる。次の日、いっしょに杭州入りする。杭州は大都会、この街に店を構え商売

をする景蘭江は「街の詩人」である。彼は馬二先生や超人のように官僚になるために四書五經を勉強しているのではない。超人は彼の手引きで杭州の詩人たちと付き合うようになり、科挙社会に無縁な彼らの生き方から、科挙の学問とは別の世界と別の論理があることに気づく。

浦墨卿道「三位先生、小弟有個疑難在此，諸公大家參一參。比如黃公同趙爺一般的年，月，日時生的，一個中了進士，却是孤身一人，一個却是子孫滿堂，不中進士。這兩個人還是那一個好。我們還是願做那一個。」三位不曾言語。浦墨卿道「這話讓匡先生說。匡先生，你且說一說。」匡超人道「二者不可得兼，依小弟愚見，還是做趙先生的好。」衆人一齊拍手道「有理，有理」浦墨卿道「讀書畢竟中進士是個了局，趙爺各樣好了，到底差一個進士，不但我們說，就是他自己心里也不快的是差着一個進士。而今又想中進士，又想像趙爺的全福，天也不肯。雖然世間也有這樣人，但我們如今既設疑難，若只管說要合做兩個人，就沒的難了。如今依我的主意，只中進士，不要全福，只做黃公，不做趙，可是么」支劍峰道「不是這樣說。趙爺雖差着一個進士，而今他大公郎已經高進了，將來名登兩榜，少不得封誥乃尊。難道兒子的進士，當不得自己的進士不成」浦墨卿道「這又不然，先年有一位老先生，兒子已做了大位，他還要科舉。後來点名，監臨不肯取他。他把卷子在地下，恨道「為這個小畜生，累我戴個假紗帽」這樣看來，兒子的到底當不得自己的。」景蘭江道「衆位先生所講中進士，是為名，是為利。」衆人道「是為名」景蘭江道「可知道趙爺雖不曾中進士，外邊詩選上刻着他的詩幾十句，行遍天下，那個不曉得有個趙雪齋先生，只怕比進士享名多着哩。」說罷，哈哈大笑。

讀書畢竟中進士—當時の知識人たちの普通の考え方である。比進士享名多着一科挙の最高位である進士であるよりも詩人として成功した趙先生のほうが有名である。

超人にとっては名か利かではない。いま手の届きそうなところにきている科挙への道は、やはり捨てきれない。科挙の大義に魅入られ、いちどこの道に脚を踏み入れたからには、この道で食っていくしかないのである。杭州にはまたいろいろな仕事があり、生活するのに都合のよいところである。書店から馬二先生のあとを受けて撰文の仕事をもらい、潘老人の従弟の潘三旦那からは実入りのいい裏街道の仕事が入ってきた。潘三は表向き、小役人であるが、もともと裏街道を歩くゴロツキ役人である。彼は超人に公文書の偽造や替え玉受験などをやらせた。替え玉受験は秀才試験の合格者である超人でなければできない仕事である。それを潘三は、同じ役所の書記からその息子のために頼まれ、五百両で請負い、超人には礼金として二百両を手渡した。超人はその金を結婚資金にして、潘三の同僚で捕吏(警察の捕り方)役の鄭の娘を娶った。

荏苒満月，鄭家屋小，不便居住。潘三替他在書店左近典了四間屋，價銀四十兩，又買了些桌椅家之類，搬了進去。請請隣居，買兩石米，所存的這項銀子，已是一空。還事事都是潘三幫衬，办的便宜。又還亏書店尋着選了兩部文章，有幾兩選金，又有樣書，売了些將就度日。到得一年有余，生了一個女兒，夫妻相得。一日，正在門首閑站，忽見一個青衣大帽的人一路問來，問到跟前，說道「這裡可是樂清匡相公家。」匡超人道「正是，台駕那里來的」那人道「我是給事中李老爺差往浙江，有書帶与匡相公。」匡超人聽見這話，忙請那人進到客位坐下。取書出來看了，才知就是他老師因被參發審，審的參款都是虛情，依旧復任。未及數月，行取進京，授了給事中，這番寄書來約這門生進京，要照看他。匡超人留來人酒飯，写了稟啓，說「蒙老師呼喚，不日整理行裝，即來趨教。」打發去了。隨即接了他歌匡大的書子，說宗師按臨温州，齊集的牌已到，叫他回來應考。匡超人不敢怠慢，向渾家說了，一面接丈母來做伴，他便收拾

行装、去応歳考。」

李老爺做給事中一樂清県時代超人をひきたててやった李県知事はさらに昇進して中央政府の高級官僚になっている。

この試験の結果、学道から一番一等の、品行優良な合格者として国子監（国立大学）の学生に推挙される。超人は故郷の樂清県に記念の額を飾り、のほりを立てるために書店から借金をし、帰郷の準備をしていたちょうどその日、景蘭江がご機嫌伺いにやってきて、潘三旦那が悪業の数々が露見し、獄につながれたことを知らせる。どうしても信じられない超人は景蘭江の親戚で刑事部の書記をしている蔣に頼んで潘三の犯行調書を見せてもらう。潘三の供述したなかには自分も関係した事件が入っていることがわかり、いずれ取調が進んで自分の名前が出てくると覚悟した超人は杭州から逃亡する事に決めた。妻の鄭氏には偽って、役人になるために都に行くので、しかるべき官についたら迎えにくるからと言って、無理矢理妻を故郷の母親のもとに送り田舎暮らしを強いることにした。

匡超人也收拾行李来到京師見李給諫，給諫大喜。問着他又補了廩，以優行貢入太学，益發喜極。向他說道「賢契，目今朝廷考取教習，学生料理，包管賢契可以取中。你且将行李搬在我寓处來盤 幾日」匡超人應諾，搬了行李來。又過了幾時，給諫問匡超人可曾婚娶。匡超人暗想，老師是位大人，在他面前說出丈人是撫院的差，恐惹他看輕了笑，只得答道「還不曾」給諫道「恁大年紀，尚不曾娶，也是男子漢「標梅之候」了。但這事也在我身上」次晚，遣一個老成管家來到書房里向匡超人說道「家老爺拜上匡爺。因昨日談及匡爺還不曾恭喜娶過夫人，家老爺有一外甥女，是家老爺夫人自小撫養大的，今年十九歲，才貌出衆，現在署中，家老爺意欲招匡爺為甥婿。一切恭喜費用俱是家老爺備辦，不消匡爺費心。所以着小的來向匡爺叩頭喜。」匡超人聽見這話，吓了一跳，思量要回他說已經娶過的，前日却過不曾，但要允他，又恐理上有碍。又轉一念道「戲文上說的蔡状元招贅牛相府，伝為佳話，這有何妨。」即便允了。給諫大喜，進去和夫人說下，擇了吉日，張灯結彩，倒賠數百金裝奩，把外甥女嫁与匡超人。到那一日，大吹大擂，匡超人紗帽圓領，金帶皂靴，先拜了給諫公夫婦，一派細樂，引進洞房。揭去方巾，見那新娘子辛小姐，真有沈魚落雁之容，閉月羞花之貌，人物又標致，嫁裝又齊整，匡超人此時恍若見瑤宮仙子，月下嫦娥，那魂靈都飄在九霄雲外去了。自此，珠圍翠繞，燕尔新婚，享了幾個月的天福。

教習一皇帝一族の子弟たちの教育学習にたずさわる教官。超人がこの官の採用試験に合格できるようにと、またしても李老爺が保証する。

もとの妻を離縁しないままに別の女性を妾としてではなく正式に妻とするのであるから二重結婚である。超人も良心の呵責をおぼえないはずがない。そこで蔡状元の故事をもって自分を正当化する。秀才めざして意欲的に勉学し孝養に努めていた頃の、素朴な輝きとやさしさはもうなくしてしまったのか。それとも杭州に来てから身につけた、他人を利用することになれてしまった、したたかな処世術がそうさせるのであろうか。もういまでは自分のことしか考えられない人間になってしまった超人である。

芝居では蔡邕という人物が、いなかで夫婦仲良く暮らしていたのだが、志しを立て試験を受けるために妻を家に残し単独上京し、それっきり音信を断つ。妻は夫の留守中、よく舅、姑に仕え、その死後、夫を慕って上京する。夫は進士第一等の状元で合格し、時の宰相牛僧儒に見込まれ心ならずも女婿にむかえられた。最後はいなかの妻が夫を捜し当て、新妻ともおりあい

をつけ、一夫二妻でめでたく暮らすという話である。芝居では確かにハッピーエンドであるが、超人の場合、そうはいかなかった。

## 8 対比される人生—強運の出世主義者から清廉潔白な芝居役者まで

李給事中に後押しされ教習の試験を受けた超人は、図らずも合格し本籍地の浙江省に身元保証書を取りに帰る。杭州に着き妻の実家の鄭家を訪ねると、樂清県の田舎に残してきた妻が傷心のあまり病を得て死んでしまったということをきかされ、妻の母親からは娘が病気で死んだのはおまえのせいだとなじられる。天の福か、天の禍か。人生の皮肉というのか、人生の面白さというのか。二重結婚のことは誰にも知られずにすむ。たとえ露見したとしても、誰にも迷惑をかけずに、もめ事が起こることもなければ、裁判沙汰になることもない。まさに強運としか言いようがない。超人は、これまでに何度も何度か窮地に立たされたが、多くの人々の善意と、このような天の配剤のよろしきを得て救われてきた。

ただ超人がこのような一大事を前にして、それをどのように受けとめ、気持ちの整理をつけるのか。物語はそういう内省的なものをいっさい描写しようとしない。妻の死に対応してこれから執り行うべきことを事柄的に叙述していただくだけである。まるで中断や振り返りを許さない、慌ただしく通り過ぎる旅人のようである。

超人は任官のために急いで京に帰らなければならないという理由で、妻の弔い方を兄の匡大に任せて、妻の眠る田舎に寄らないで、身元保証書を手に入れるまで杭州に滞在する。三、四日して、景蘭江が刑事部の蔣書記をつれてきた。蔣によると潘三が超人に会いたがっているというのであるが、超人は今自分が任官できるかどうかの大事な時機にさしかかっているから、できれば自分の経歴に傷を付けたくないので、いずれ何年かして幸い豊かな地方の官を授かるようになったら、数百両の銀をもって助けに来るからと伝えてくれるように頼む。おそらく、潘三は自分の悪事に手を貸してくれたくれた超人の名前を獄の取調でも口に出していないのであろう。任官にかかわる大事な時機であるから会えないとする超人の言い分にも理がある。しかし、作者は前第十九回のエピソードで「師と弟子は情意あり、再びもちつもたれつ手を取り合い、友と友はおのおのその立場あり、意気通じるとは言いがたし」という教訓めいた詩(うた)をもってきて、超人と李給事中、超人と潘三、それぞれの間人間関係を比較し、それがどのような方向に向かうのかを暗示予告していた。作者は利害打算のために結びついた超人と潘三の両者の間には義理がなかったことを非難しているのである。

身元保証書を手にした超人は一路新妻の待つ都を目指して杭州の渡し場、断河頭から旅立つ。同じ船に乗り合わせたのが博学清廉の文人、牛布衣である。超人は牛布衣との閑談のなかで、自分の学問の浅薄さを暴露する。作者はこの後も暗示的、間接的に、他の人物のエピソードを借りて超人の生き方に徐々に異を唱えていく。たとえば、超人と同じように二重結婚する牛浦郎を登場させることによって(第二十回から二十四回にかけて)、牛浦郎のもつ否定されるべき醜悪な面が超人のイメージと重なるように物語は仕組まれる。父親の半身不随や住家の火災消失という障害を乗り越えて、禁欲的に勉強をし秀才になるまでの努力の過程はその名前通り、人を越える超人的な努力を暗示するものであろう。それらの障害は人格形成のために課された試練ともなった。つまり、それまで励んできた学問の道はまだ功名富貴という欲望に色づけられていない、純粹に自己修養のためにあったのである。ところが、秀才の身分を得て科挙社会に参入していった超人を待ちかまえていた障害は試練ではなく落とし穴であった。



科挙の制度は権力構造の上に成り立っているのであるから、権力どうしの対抗や乱用に曝されるのは当然のことであったが、超人はこの社会で生きて行くためには権力に頼り、権力を使うのがもっとも功利的な生き方である事を学ぶ。このとき、科挙試験のためにする学問はより強い権力とより上位の身分を得るための単なる手段になってしまう。作者は超人の人生を生き方の違う前半と後半の対照のなかに位置づけ物語化したのであろう。超人が人の善意によって自己存在を全うすることができたのは、自己実現の意欲と運の強さにあったのはもちろんのことであるが、このような挙業人たちのもつ科挙の権力を社会全体で認め合っていたからである。

この物語のどのエピソードも主人公はみな科挙に応じて士大夫社会に仲間入りした人物か、あるいは地主官僚として始めから士大夫階層に属する人物ばかりであったが、第二十一回から二十六回にかけて、その生涯、士大夫階層に属さなかった人物を二人新たに登場させる。一人は小間物屋の息子の牛浦郎、もう一人は賤民階層に属する芝居役者の鮑文卿である。作者は彼ら二人の生き方、特にその士大夫社会との関わり方を対照的に並べ、その比較をとおして、士大夫社会に対して鋭い批判をあげせる。

牛浦は詩が好きで、寺に出入りしているうちに和尚にその詩文好きを認められる。ちょうどその頃、寺に寄寓していた高名な詩人、牛布衣が病気になり、二冊の詩集を形見として和尚に託してこの世を去る。和尚はこの詩を牛浦に見せてあげる事を約束していたが、待ちきれない牛浦は和尚の留守中に盗み出す。開けてみると、その詩は今風で分かりやすく、それも偉い政治家や文人たちとやりとりしたものばかりである。詩ができるおかげでこういう上流階層の人たちと交わる事ができるのだと考えた牛浦は、布衣の印鑑を作り、詩集に押し、詩人の牛布衣になりすまして郷里に妻を残して、牛布衣とつながりのある県知事のいる安東県に出稼ぎに行く。その途中の船で牛浦と知り合いになり、しばらくは生活の面倒まで見て貰っていたが、玉浦を裏切ったことで、仕返しされ、あやうく一命を落とすところであった。それを安東県で芝居衣装の仲買いを営む黄という商人に救われ、秀才の身分を持つ立派な人物ということで黄家に婿入りする。そこでも、詩人牛布衣の名を騙り、安東県の役所に入出入りして、もめごとの口利き手数料をかすめとり、食の糧としていた。これこそ科挙社会の寄生虫そのものである。この話の裏には、秀才様というだけで信用してしまう社会の風潮、あるいはものの真偽を見分けられないで簡単にだまされる士大夫に対する嘲弄の刃が隠されている。

いっぽう、芝居役者の鮑文卿は南京で常設の小屋をかけ興業し、ときには大家の屋敷に祝い事に踊りや歌を披露することもありそれが縁で権力者のお気に入りとなり、側近く侍り遊興閑談の相手をし、さらには政治向きの話に加わることも許される。芝居役者の彼は、社会的には娼婦や捕り方あるいは奴僕と同じように賤民扱いされ、科挙の受験資格を持たず、官吏にもなれない最下位の身分であり、政治的利権からもっとも遠いところに属していたが、だからこそかえって、ことの善悪に鋭い感受性と潔癖さをもって士大夫以上に士大夫らしく、義理をわきまえ、徳を行い、自らの身の処し方にきびしく生きた。文卿は、人が金をもって知事への口利きを頼んで来ても決して引き受けなかった。権力者は彼の人間性に信をおき、彼に本心を打ち明け、彼の公平無私な判断を仰いだ。

分不相応な生き方を望んだために虚偽の人生を歩まなければならない牛浦郎と対照的に、芝居という虚構世界に秘められている真実そのままに生きる老優鮑文卿のみごとな生き方がいっそう際だって映える。この鮮やかな対比は、士大夫たちの利己心や俗物性を暴いて、挙業（科挙の学問）の人生をも虚業にしてしまうほどの効果がある。このように見てくると、この物語は、単に平板な事実性だけによりかかっているのではなく、やはり計算された虚構性を有して

いることがわかる。牛浦郎はまた鮑文卿と対をなすだけでなく、前のエピソードの主人公である匡超人の功利的な生き方と、牛浦の寄生虫的な生き方が比較されている。

匡超人の場合は名もなく貧しい者が社会の底辺から士大夫社会に這いあがるには並たいていのことではないこと、禁欲的に勉強し、献身的に孝行し、それでも足りなくて時には人を踏み台にして利己的、保身的に生きていかなければならなかった。作者は女々しく不甲斐な男、えげつなくこずがらい男、無節操で無責任な男どもの男社会の物語を語りながらも、女性には男に負けない能力やたくましさを認め、彼女たちに対しては同情と優しさをもって思い入れをする。

ところが、匡超人の物語のしめくくりで、作者はもとの妻を死なすことによって超人の二重結婚を是認してしまった。風流（色恋に精通している、色気があるという意味）の才子が妾をもつことを当然視する士大夫社会の風潮を戒め、妾をもつにも朝廷が法律（お達し）で制限すべきであるという意見が作品中で述べられる。これはおそらく作者呉敬梓の考えであろう。このような作者のフェミニスト的女性観にとって超人が都に待っている新妻の元に戻って幸せに暮らすことは許せなかったのであろうか。作者は、一つには超人に罰を下すために、もう一つには「祭状元が牛宰相宅に婿に招かれる」の故事に付された、一夫二妻でめでたく暮らしたという通俗的な解釈に抗議するために、超人から物語を引き継いだ牛浦郎、牛玉圃という牛姓を名のる人物をつぎつぎに登場させることによって、牛姓の繰り返しのもつ逆効果、つまり牛宰相の出てくる故事に疑問を投げかけた。このほかにも牛浦の寄生虫的な生き方を批判するために下の下のびろろな糞尿の場面が描き込まれる。好ましくない人物を揶揄するために直接的、間接的に糞尿や嘔吐という不名誉な飾りをつけるなど細かな仕掛が随所に施されている。このことはこの物語がエピソードの単なる連環ではなく、それぞれの主人公たちは意味ある役割を担い、しかも対をなして連環しているのである。

## 9 生活者としての意識に目覚めて

物語は連環方式をとって、鮑文卿から養子の鮑廷璽へ、廷璽は新しいパトロン（たいこもちとして仕える）を求めて杜慎卿へ話を繋ぐ。この人物たちもそれぞれの文化・社会コンテクストのなかで、個性的に描かれる。慎卿は端から廷璽を援助する気がないので、替わりに従兄弟の杜少卿を紹介してやる。

鮑廷璽道「除了老爺，那里還有這一個人」杜慎卿道「莫慌，你聽我說。我家共是七大房，這做礼部尚書的太老爺是我五房的，七房的太老爺是中過狀元的，後來一位大老爺，做江西贛州府知府，這是我的伯父。贛州府的兒子是我第二十五個兄弟，他名叫做儀，号叫少卿，只小得我兩歲，也是一個秀才。我那伯父是清官，家里還是祖宗下的些田地。伯父去世之後，他不上一万銀子家私，他是個呆子，自己就像十幾萬的。紋銀九七他都認不得，又最好做大老官，聽見人向他說些苦，他就大捧出來給人家用。而今你在這里幫我些時，到秋涼些，我送你些盤纏投奔他去，包你這千把銀子手到拿來。」鮑廷璽「到那時候，求老爺寫個書子門下去。」杜慎卿「不相干。這書斷然寫不得。他做大老官是要獨做，自照顧人，並不要人幫着照顧。我若寫了書子，他說我已經照顧了你，他就賭氣不照顧你了。如今去先投奔一個人。」鮑廷璽道「却又投那一個人。」杜慎卿道「他家当初有個公老管家，姓邵的，這人你也該認得。」鮑廷璽道「是那年門下父親在日，他家接過我的戲去與太太做生日。贛州府太老爺，門下也曾見過。」杜慎卿道

「他不歡喜人叫他老爺，你只叫他少爺。他又有個毛病，不喜歡人在他跟前說人做官，說人有錢，像你受向太老爺的恩惠這些話，總不要在他跟前說。總說天下只有他一個人是大老官，肯照顧人。他若是問你可認得我，你也說不認得。」一番話，說得鮑廷璽滿心歡喜。在這里又効了兩個月勞，到七月盡間，天氣涼爽起來，鮑廷璽問十七老爺借了幾兩銀子，收拾衣服行李，過江往天長進發。

この杜少卿という人物はこの物語の作者吳敬梓そのものである。彼は官僚地主の家に生まれ、儒のなかのエリートでありながら、士大夫社会にたいして否定的主張を行い、徹底した反俗精神をもって体制に反抗的な生き方をする豪傑の人物である。人は杜少卿のような生き方が自分の体制に都合のよい場合には豪傑とか反俗とかいっててもはやすが、それが自分たちの社会の流儀に合わなくなると、社会の秩序を乱すものとして危険視し、変人扱いして疎外する。普通の人は豪傑あるいは反俗ともてはやされても、金のある一時的なもの、自分の全財産を喜捨してまで仏に帰依するほどに自己を虚しくすることもできない。ところが、杜少卿は衣食は着ほうだい、飲みほうだい、出入りの仕立て屋や医者、役者のために人物を見ずに金を貸したり、くれてやったり、湯水のように何十、何百両もの金を使ってしまう。また交際の相手も坊主であろうが、乞食であろうが、付き合い、逆にれっきとした人物は相手にしない。彼は決して人からおだてられるのがすきで豪傑ぶっているのではない。金も将来の打算のためではない。早く家がつぶれることを目指しての散財であり、他人への施しである。きわめて刹那的であるが、じつに豪快である。杜家に二代三十年にわたり食客として仕えてきた婁煥文が病重くして死期を悟り、故郷に帰るとき少卿に遺言する。

我在你家三十年，是你令先尊一個知心的朋友。令先尊去後，大相公如此奉事我，我還有甚么話，你的品行，文章，是当今第一人，你生的個兒子，尤其不同，将来好好教訓他成個正經人物。但是你不会当家，不会相与朋友，這家業是断然保不住的了的。像你做這樣慷慨仗義的事，我心里喜歡，只是也要看来說話的是個甚么樣人。像你這做法，都是被人騙了去，没人報答你的。雖說施恩不望報，却也不可這般賢否不明。你相与這臧三爺，張俊民，都是沒良心的人。近来又一個鮑廷璽，他做戲的，有甚么好人，你也要照顧他。若管家王胡子，就更壞了，銀錢也是小事我死之後，你父子兩人事事學你令先尊的德行，德行若好，就沒有飯喫也不妨。你平生最相好的是你家慎卿相公，慎卿雖有才情，也不是甚么厚道人。你只學你令先尊，将来断不喫苦。你眼里又沒有官長，又有本家，這本地方也難住。南京是個大邦，你的才情，到那里去，或者還遇着個知己，做出些事業來。這剩下的家私是靠不住的了的。大相公，你聽信我言，我死也瞑目。」杜少卿流涕道「老伯的好話，我都知道了。」忙出來吩咐雇了兩班脚子，抬婁太爺過南京到陶紅鎮。又拿出百十兩銀子來付与婁太爺的兒子回去 後事。第三日，送婁太爺起身。

少卿がもっとも信をおく人間である婁煥文の最後の戒めを深く心にとどめる。落ちぶれていく不安や焦燥を内省的に語ることがなかった少卿の心情が死んでいく者の口から吐露される。科挙と家の二つの制度は、中国社会の根幹をなすものであったが、「あなたの目には官も家もない」という言葉はたいへん厳しい。少卿の態度は、この二つのものと真っ向から対決したり、根本から否定しようというのではない。いまはこの足枷手枷から一刻も早く解放されたいだけなのである。彼は科挙の学問に励む気は毛頭ない。もちろん官途につこうなどはさらさら考えていない。朝廷から特別お召しがあっても病気を理由に断る。科挙の学問を真の儒、真の学問ではないとして、世の士大夫たちにたいして吳泰伯のような古えの聖賢の心に帰ることを呼

びかける。

彼はまた中国社会を基本的に支えている、父系の祖先を同じくする個人の共同体としての家、すなわち宗族制度としての家から解放され自由に生きようとする。人倫の情に基づいた親子や夫婦の情愛を決して否定するわけでない。かれの目には世の士大夫たちの風流や豪俠も見せかけのものであり、これらは士大夫支配の社会のうえにあぐらをかいていればこそできるものであり、科挙に合格できない者のうさ晴らしにすぎない。本当の反俗は、おそらく遼太守のように「自分の息子が早逝したのも自分が官吏になったのでバチがあたったからで、孫には科挙を受けさせないことにしている。」(第九回)とする因果応報の信仰の境地にまで悟達することである。ただ、遼太守にしても後から結果論的に悟るのに比べて、少卿の場合いま現実にわが身をもって実践している。しかしそこには悲愴感が少しも感じられない。

故郷を捨てて、南京で都会生活を送る杜少卿は重くのしかかっていたものから解放され、いっそう反俗精神を発揮し社会のしきたりや社会通念からはずれた言動を多くする。妻を伴い居酒屋に出入りしたり、墓地を移し替える悪習を法律で規制すべきだなど、人の不評をかう奇行にはしり、人を驚かす警句を発する。

杜少卿は官途につかないまでも、先祖が残してくれた家産を質素儉約して食いつないでいけば、老百姓の衆人よりはずうと良い暮らしができそうなものであろうが、地方の名門としては、衆人と同じような生活をしていくわけにはいかない。家格と見合ったさまざまな付き合いや儀礼を維持していかなければならない。彼はそれに耐えて行けないことを自覚したのせであろう。最初は、一族の身内から財産争いに伴う仕打ちを受けたことによって、自暴自棄になったのか。それとも何度科挙を受けても官途につけないところから来る確固とした思想に裏打ちされた反抗であったのか。千両もの大金をもって南京に来たからには、一介の市民としてそれを元手に商売を始めることもできたであろうが、南京でも泰伯祠の建立と式典の費用に三百両を寄付する。これではいくら金があっても足りない。南京の寓居は一ヶ月八両もする河房(河沿いに面した貸し別荘)である。千両は大金であるが、出ていくいっぽうの生計であり、入る手だてを講じなければすぐなくなる金である。ときには蔵書を売ったり、詩文の代作を頼まれたり、少しばかりの金が入ることもあったにしろ、やはり借金に明け暮れていたのであろう。彼の最良の友人、莊徵君やもっとも敬愛する虞博士たちが金を用立てくれたのかもしれない。

当然世間の目は冷たい。「いまや天長の杜儀は落ちぶれ、詐欺や騙りで飯を食い、女房と居酒屋に出入りするなど品行もよくない。何で詩文がじょうずなものか、たかが知れているではないか。」と陰口が流れる。年ごとに困窮落魄していくなかで生活者としての意識に目覚めていく。陋巷に一介の市民として生活しながら、老百姓(庶民)の生活のなかにこそ人間らしさが発揮できる契機のあることを見いだす。ひとりの庶民としてというよりもむしろ生活者として、よりよく生きるためにはどうすればよいか、その理想的な境地を最終第55回「市井にまた幾人かの奇人たちが現れた」で作者は啓示する。

市井に現れた幾人かの奇人たちはちょっとした才能の持ち主である。茶店の主人の蓋寛は詩や絵がじょうずである。付け木売りの王太は碁の天才である。仕立て屋の荆元は琴と書を得意とするほか詩文がすきである。彼らはみな社会に表立つ仕事の他に自分の趣味や自分の好きな道を大事にしている。むしろその好きな趣味のために働いているのである。そのために分相応にささやかな人生を送りながら自分の仕事や才能に誇りをもち生きがいを感じて生活しているのである。

荆元は知識人ではないが、何人も侵すことができない確とした処世哲学をもっている。ある日彼は清涼山の裏手に住む友人の于老人を訪ねる。于老人は農業につとめ、五人の子供を立派

に育て上げ、この子供たちと一緒に畑を作っているが、いまは半隠居の身分である。荆元は于老人のように大地と自然を仲立ちにして仕事と生活と生き方のいずれも両立させ心安らかに生きられる農民の生活のほうにもっと憧れているようである。次の日二人は清涼山の山紫水明のなかで香を焚き、琴の音を楽しんだ。荆元が于老人に「古人は桃源に世を避けるというが、桃源なんか要りません。このようにのんびりと自由に町のなかの山林に暮らしていれば、それこそこの世の神仙なのであるから。」と言う。これは真に大悟した隠者のありかたを示した伝統的な考え方である。老百姓のなかに住み、老百姓と同じ生活をしていてもその身の清さを保つという理想的な生き方である。

人と違ったものを持ち、人と違ったことをすることによって自分らしさを発見し、そこに自己存在の証を求め、生きていることの意味を見いだそうとする。普通と違ったことをするのに普通と違った場に身を置くのではなく一般誰でもがいるところ、つまり生活の場にそれを求める。俗にあって俗にならぬ。このような生き方が可能であった。多くの人にとって、食って生きて行くために仕事をする、つまり生存を確保するだけでもたいへん難しい時代であって、趣味やマイホーム主義のために仕事をするという余裕がなかった時代に奇人とみなされるこれら老百姓のような生き方ができる市民社会が形成されていたということである。仕事が生活のためだけにあるのではなく生き方にも関係するということは古くて新しい人生の問題である。仕事と生活と生き方の三つは切り離して考えることはできない。このうちの二つあるいは三つとも結びついたかたちで職業が選択されるのであるが、そのどれに比重を置くかはその人の考え方による。于老人のように自分の性分にあった仕事をするというのも一つの見識を持った生き方である。

婁煥文が杜少卿に遺言した「徳行がよろしければ、飯が食えなくても大したことはありません。あなたの才情をもってすれば知己に巡り会い何か仕事をすることができます。」という言葉にはまさに生きること（飯喫）と仕事（事業）と生き方（徳行）の三つのなかで生き方の問題を提起していたのである。この最終第55回は最初第1回と対応するように構成されている。第1回では歴史上実在する元末明初の文人画家王冕が作者の理想にもっともかなった生き方をした人物として登場する。王冕は学校関係の人や役人になることをきらい、独学で天文、地理、経書、史書を修め、その深い教養と高潔な人徳が認められ、時の権力者から甘い誘いがあったが、断固拒絶し自己の性分にあった生き方を通し最後は人知れず会稽山中に死んだと言われる。作者はこの孤高の人格者、王冕の生き方をこの物語の枕として士大夫社会に対する否定的主張としてつきつけた。

作者は社会の指導者たる士大夫階級のなかには学問道徳を軽視し出処進退をわきまえない人たちが多く、そういう彼らの無節操、不見識ぶりを批判するいっぽうで、老百姓がこのような腐敗した連中のいる科挙社会に無批判に組み込まれ、功名栄達のためにがりがり亡者になっている悪い風潮を嘆き、彼らの分をわきまえない生き方を冷ややかに眺めている。しかし、作者は読書人としてのプライドと市井の生活者としての生活感覚をもって彼らと同じ次元に立ち、仕事と生活と生き方はどうあるべきかを体験的に理解していた。だから、科挙のために勉強する儒の人たちの生活を描いていくうちに、名もない老百姓のなかにも、世間から奇人と言われるが、人性にかなった人間らしい立派な生き方をしている者がいることを発見し、世の人々、特に科挙のために踊らされている老百姓たちに彼ら奇人の生き方を新しいライフスタイルとして指し示したのではないだろうか。

奇人と呼ばれるひとたちが自分の性分になつた生き方、主体的で自立した生き方ができるのは作者呉敬梓の生きた時代が社会経済の発展と社会組織の安定とともに余裕のある市民生活

と豊かな生活文化が営まれていたからである。それは人々にありのままの人間の生き方に対する自覚と生活意識の成熟を促した。作者もこのような社会的風潮のなかにあって生活者である自分をありのままに描こうとした。また、生活意識と生来の反俗精神とがあいまって、別の角度から人間をみることが可能になった。

作者の人間観照の仕方は、人間存在のあり方を体系的に述べる思想家のそれではないが、この物語のなかで登場人物の口から作者の共感を帯びた新しい人間観が漏れ聞こえてくる。たとえば、貴賤の別なく男女の別なく人間の能力は平等であること、また鬼神の存在を否定し、迷信や神秘主義の排除など、人間中心の合理主義的な考え方や世界観には確かに時代的な制約や限界があるものの、近代思想につながる何かを感じさせるものがある。またこのように生活に深く入り込んだ生活者であるという意識は作者の物語知性にも清新なりアリズム精神を呼び起こし、新しい文体をもたらすことにもなったのである。

#### 参考文献資料

- 阿 英 「晩清小説史」(飯塚朗, 中野美代子訳) 1979年 平凡社  
 青木正児 「青木正児全集 第二巻」 1970年 春秋社  
 阿部兼也 風刺の砦(「儒林外史」の世界) 1970年 内田道夫編「中国小説の世界」 評論社  
 稲田 孝 「儒林外史」(稲田孝訳) 1977年 平凡社  
 伊原大策 「儒林外史」における風刺の変質とその背景 1979年 集刊「東洋学」 第42号  
 小川環樹 「中国小説史の研究」 1971年 岩波書店  
 狩野直喜 「清朝の制度と文学」 1984年 みすず書房  
 倉光卯平 儒林外史における人間性追求 1952年 西南学院大学論集4(1)  
 河野正彰 儒林外史考 1964年 「漢文学」(福井大学) 第11輯  
 胡 適 「胡適文存 第一, 二集」 1979年 遠東図書公司(中華民国)  
 志村良治 「中国小説論集」 1986年 汲古書院  
 鈴木陽一 「儒林外史」の文体について 1977年 「中国語学」224号  
 塚本照和 吳敬梓の小説「儒林外史」について 1959年 集刊「東洋学」第1号, 「儒林外史」試論(一)(二)(三) 1970, 1972, 1973年「中文研究」11, 13, 14号  
 松村 昂 王免傳考—明代史官の文学— 「名古屋大学教養部紀要」第21輯  
 宮崎市定 「科挙史」 1989年 平凡社  
 村上哲見 「中国文人論」 1994年 汲古書院  
 魯 迅 「魯迅全集 第九巻」 1973年 人民文学出版社(北京)